



木下直子著

日本語のリズム習得と教育

早稲田大学出版部、2011 年発行、246p.

ISBN : 978-4-657-11504-1

中川 千恵子

1. はじめに

本稿は、木下直子（2011）『日本語のリズム習得と教育』の書評である。これは著者が早稲田大学へ 2010 年度に提出した博士論文をもとに執筆されたものである。

リズムとは、何か一定の構造が規則的に繰り返すことによって、心地よさを生じることである（窪園 1993）。「リズムカルに聞こえる」ということは心理的なものであって、人や場合によりリズムの捉え方は異なるため、客観的な検証が困難なところがありジレンマが起こる。確かに知覚的視点からリズムを捉えるとジレンマが生まれるが、よりジレンマが少ない物理的視点から捉えることもできる。

本書は、どのように聞こえるかという心理的視点からでなく、物理的視点から日本語のリズムを捉え、教育に生かす目的で詳細に調査し分析・検討し書かれたものである。

本書は次の 8 章から成る。第 1 章の序論で韓国人日本語学習者（以下 KS）に関するリズム研究が不足している要因を挙げ、本研究の意義と研究目的を述べ、第 2 章で先行研究をまとめ、第 3 章では本研究で用いるリズムの計測法を決定し、第 4 章で学習者の第一言語である韓国語のリズムの特徴を明らかにし、第 5 章と第 6 章で 3 年間に及ぶ生成・知覚調査から習得過程を明らかにし、第 7 章では習得に関わる学習者要因を検討し、第 8 章において総合的考察をした後、新しいリズム教育を提案している。

2. 本書の内容

各章の概略を紹介する。

2.1 序論

第 1 章では、まず研究の必要性和目的について述べている。発音は母語の転移が顕著に見られるとはよく言われることである。KS の日本語発話では、主に特殊拍に起因する、いわゆる「リズムの崩れた発音」が上級レベルになっても残ることが少なくなく、聞き手

にとって聞きづらく内容が伝わらないことすらある。母語転移の可能性を考慮すると、韓国語のリズムとの比較が必要であるが、未だそうした研究は報告されていない。リズム習得の過程もあきらかではなく、教育方法の検討も十分とは言えない。その理由を挙げて解明すべき研究課題へつなげている。

まず、第一に言語リズムの分析上の問題である。日本語リズムの分析は「拍（モーラ）」という音韻単位を用いて行われることが多いため、学習者の母語のリズムとの比較ができない。この問題点を解消するために、どの言語でも計測可能な計測法の検討が必要である。

第二に、音声習得研究においては、横断調査に留まることが多い。横断調査は重要であるが、縦断調査による実際の習得過程を観察することが不可欠であるのにも関わらず、調査協力者の確保が困難であることも影響して、縦断調査は少ない。

第三に、生成と知覚の習得がどのように進んでいるかの研究も少ない。

第四に、習得には、学習動機やストラテジーなど様々な学習者要因が影響しているもののそうした研究が少ない。

本書では、以下の5点の解明を研究課題としている。

1. 言語リズム計測法
2. KSの日本語のリズムの習得過程
3. 文章のリズム的特徴
4. 生成と知覚の関係
5. 習得に関わる学習者要因

2.2 先行研究

第2章では、先行研究を整理しまとめている。

Dauer(1983)は、①音節構造、②母音弱化の程度、③強勢の程度から言語のリズムを分類している。英語はCVCが50%以上で閉音節が多く強勢拍リズムで、スペイン語やフランス語はCVが70%以上で開音節が多く音節拍リズムと分類されるように、音節構造の違いによる影響は否定できないだろう。学習者のリズムには母語が影響する可能性が大きく、母語のリズムとの比較が重要となる。比較のためには、どの言語にも使用できる計測法を検討する必要がある。

また、日本語のリズムについては、モーラ拍リズムであり、拍の等時性が言われることが多かったが、物理的には等時とはならない。等しいと感じるのは心理的あるいは、表記による可能性も考えられる。これまでモーラ拍リズムの実在性が検討されてきたが、見解の一致は見られていない。教育効果を期待して、2モーラ1単位のリズムが考案され実際に指導に用いられているが、日本語母語話者(以下NS)の感覚とはずれる。

学習者の日本語リズムについて生成・知覚の両面での知見を整理すると、見解が一致するところは多くないようである。縦断的研究や生成と知覚の関係についての研究も極めて少ない。さらに、第二言語習得理論や習得に大きく影響する可能性のある学習動機や学習ストラテジー等学習者要因についてもまだまだ研究が足りない。

前述のように、リズムは強勢拍リズムと音節拍リズムに大別されることが多いが、一方で、二分化することに疑問視する意見もある(窪田 1993)。著者は、この捉えどころのな

いリズムをどう捉え、さらに、習得に影響する母語の違いを含めた複雑な学習者要因をどう扱うのだろうか。

2.3 リズムの計測

第3章では、リズムの計測法について検討を行っている。母語話者評価は心理的でありばらつきがある。また、物理的な視点からこれまで日本語教育において用いられてきた「モーラ」に基づいた従来の計測法 (Ratio Measures: RM) は、学習者の第1言語との比較が困難という問題点が指摘できる。そこで、本研究では、乳幼児による言語獲得・言語弁別能力を明らかにする目的で使用されている Interval Measures (IM) および Pairwise Variability Indices (PVI) という2種類の計測法を加えた3種類の計測法から、リズム研究に適した計測法を検討している。無意味語を調査語として、子音区間長 (consonantal interval)、母音区間長 (vocalic interval)、母音間区間長 (intervocalic interval)、全体長を計測し、統計分析を行った。結果、RM は $nPVI_v$ (n は「正規化した」、 v は「母音区間」を意味する) と相関が高く、また、 $nPVI_v$ と RM の並存的妥当性が認められたため、本研究では PVI(Grabe and Low, 2002)を用いることになった。これによって、言語による違いを越えて客観的にリズムを検討できることになったことは、意義深い。

2.4 第一言語のリズム

第4章では、本研究の調査対象となる KS の母語のリズムを PVI の計測法を用いて検討した。先行研究では、韓国語のリズムについての見解は一致していなかった。しかし、音節構造で見ると、日本語では開音節が基本であり、「母音(V)」と「子音+母音 (CV)」の出現頻度が高く、「子音+母音+子音 (CVC)」の出現頻度の高い韓国語では大きな差異が生じると推測される。KS (ソウルおよび釜山方言) と NS がイソップ物語「北風と太陽」をそれぞれの母語で読み上げた音声資料と英語話者のコーパス資料を比較した。結果、韓国語のリズムは日本語とも英語とも異なるリズムを持ち、ソウルと釜山の方言によるリズムの違いがないことが明らかになった。また、Grabe and Low (2002)の行った18言語のリズムの中での位置付けを試みた。

統一された見解のなかった韓国語のリズムが強勢拍リズムとも音節拍リズムとも言えないということが明らかになり、他の言語と比較できることができたことは高く評価できる。

2.5 生成調査

第5章では、KS がどのように日本語のリズムを習得していくのかについて2種類の調査を行っている。生成調査Aでは、キャリアセンテンスに入れた単語読み上げによる3年にわたる縦断調査を行い、特殊拍の習得過程を調査した。生成調査Bでは、3年目に「北風と太陽」の文章読み上げ調査を行った。両調査とも PVI を用いて検討した。調査協力者の大学生は最終的に KS17名、東京方言話者5名であった。

生成調査Aでは、3年にわたり有意な変化の有無を確認した。1) NSによる長音の $nPVI_v$ は自立拍の $nPVI_v$ より大きく、促音や撥音の $nPVI_v$ は自立拍の $nPVI_v$ より小さい。促音や撥音は音声的には同程度の持続時間ではない。2) KSの特殊拍は、2回目でNSに近づ

くが、3回目でNSと離れていく様子が見られた。3) KSの特殊拍は、長音、促音、撥音ともに3回にわたり有意な変化は見られなかった。KSにとっては長音が最も難しく、促音は習得していた。特殊拍は同じように習得が進むわけではない。4) リズム型については、型により難易度が異なることが分かった。例えば3音節で122型（単語例：授業中）のような重音節と軽音節から成る複雑なリズムが難しい。

生成調査Bでは、KSの日本語文章読み上げにおけるリズムは韓国語読み上げリズムと同じであり、NSによる日本語のリズムとは異なることが明らかになった。バイリンガルの人には2つのリズムを使い分けているのではなく、用いているリズムは同じであるというCutler et al. (1992)の見解を指示するような結果であり興味深い。

戸田(2007)は、特殊拍の習得には、単音の持続時間の測定だけでは不十分であり、複数の母音と子音の連続が生み出す言語リズムについて理解を深め学習者の習得過程を観察する必要があると述べている。4章でKSの母語のリズムについて、5章でKSの日本発話時のリズムについて知見を得ることができ、17名もの学習者の長期にわたる習得過程を観察することができたことは評価に値する。しかし、単語発話時とは違って、文章のリズムには特殊拍以外の要素も含まれているが、文章内の特殊拍の様子については触れられてないので、その点が物足りなく感じられた。

2.6 知覚調査

第6章では、2種類の実験を行っている。知覚実験Aは、キャリアセンテンスに入れた単語の知覚範疇化についてであり、知覚実験Bは、3音節語の聞き取りからKSの特殊拍の習得過程の解明を試みるものである。結果、KSの日本語特殊拍の知覚を判断する基準は、NSの知覚判断境界値(Boundary Position:以下、「BP」)および、知覚判断境界幅(Boundary Width:以下「BW」)とは異なっていたが、変化は一樣ではなく、特殊拍の種類によって異なることが分かった。また、1回目より3回目の正答率は上がるが、3回目で少し下がるというように、生成の結果同様、線型にNSに近づいてはいない。KSは長音の知覚が最も困難である点は、生成調査とも一致している特徴であり興味深いところである。

2.7 習得に関する学習者要因

第7章では、第5章と第6章で習得が進んだ学習者と習得が進まなかった学習者がいたことから、その原因について様々な学習者要因から分析・考察している。言語学習に関するアンケート、学習動機・ストラテジーに関するアンケート、知覚学習スタイルに関するアンケート、OPI(Oral Proficiency Interview)、LST(作動記憶容量)等、5つの調査を通してリズムの習得に関与する学習者要因の解明を試みた。結果、日本語能力や年齢要因は習得に関与しないことがわかった。生成・知覚の習得が進んだ学習者は母語話者のように話すことは重要だと考えており、ビリーフやNSに対する感情が習得に影響することが示唆される。知覚の習得度が高かった学習者は聴覚型学習スタイルを持つ傾向がある。生成の習得が進んだ学習者は日本語版のLSTで作動記憶容量が大きい学習者であった。教師が経験的に感じていたことを確認することができたのは重要なことである。

2.8 結論

最終章の第8章では、本研究で行った調査の結果を総合的に考察している。まず、生成と知覚の調査を行った結果、類似した特徴は見られるものの、知覚と生成にほとんど相関がないということが判明した。この結果を反映して、著者は従来のリズム教育方法および教材を分析したうえで、新しいリズム教育の考え方を提案している。第一に、発音教育だけでなく、聞き取りの練習が不可欠である。第二に、日本語のリズムと日本語学習者の母語のリズムの違いを把握し、教育に生かす必要がある。第三に、特殊拍の中で、長音が最も困難である点に留意すべきである。第四に、学習者要因を考慮して練習する方法を具体的に提示している。第五に、認知的アプローチの観点からリズム教育を捉えなおす。ここで気付きを促す説明と練習や意味交渉に注目させるタスクを行うことを提示しているが、発音が運用に結びつくためには重要なポイントであろう。さらに、研究成果を踏まえた独自のリズム教育用教材の作成、実際に教室活動のデザインを提案しているが、現実の指導にとって示唆に富む。

3. 終わりに

本書が従来の研究と一線を画す点は以下である。1) 計測法の妥当性を検討し一貫した計測法を用いて調査した。2) これまで少なかった縦断的調査を行って習得研究に知見を加えた。3) 学習者の母語と日本語発話における文章のリズムを検討した。4) 生成と知覚の関係を追及した。5) 学習者要因による影響を追求した後、具体的な教育方法への提案をした。

年数をかけて多面的に検討した研究であり、今後、各章で得られた知見をさらに充実・発展させることを期待する。教育的には、多様な学習者に多様な方法を提示する必要があるということ、また、単語レベルの練習ではなく、意味内容につながるようなリズム教育を推奨していることは、運用につながる音声教育が必要と考える評者も強く共感を覚える点であり、今後の展開を見守りたい。

本書で心理的視点でなく物理的視点からリズムを検討したことは意義がある。しかしながら、評者は、再び最初の問題点に戻ってしまう。聞き手にとっての聞きやすい発音、「リズムの崩れた発音」とは何だろうか。リズムは難しい。

参考文献

- 窪菌晴夫 (1993) 「リズムから見た言語類型論」『月刊言語』11月号、62-69.
 戸田貴子 (2007) 「日本語教育における促音の問題」『音声研究』11(1)、35-46.
 Cutler, A., Mehler, J., Norris, D., and Segui, J. (1992) The monolingual nature of speech segmentation by bilinguals, *Cognitive Psychology* 24, 381-410.
 Dauer, R. M. (1983) Stress-timing and syllable-timing re-analysed, *Journal of Phonetics* 11, 51-62.
 Grabe, E. and E. L. Low (2002) Durational variability in speech and the rhythm class hypothesis. *Papers in Laboratory Phonology* 7, 515-546.

(なかがわ ちえこ 早稲田大学日本語教育研究センター)